
琴結学園の荒日常

シンショク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

琴結学園の荒日常

【ZPDF】

Z6803M

【作者名】

シンシヨク

【あらすじ】

広大な敷地を有する彼らの学び舎「琴結学園」。これはこの場所でおこる毎日の日常と非日常の物語である。

「カット！カット！」
「恋愛ストーリーなのよ
「ばれますって。
「夏の大会はどうするんだ？」

「どうして、元気いるんだ？」

「Iの学園を出るためだ。」

様々な出来事が織り成す、学園ストーリー

一話「学園生活？」

文武両立といつ言葉がある。

意味としては、学生の身分であれば分かると思うが、勉強と部活動を両立する」とある。

はたして、それが思つよつてく学生が一体どれだけいるのだろうか？

必ずではないにしろ、勉強が疎か、又は部活動が疎かになる人が少なからずいるはずである。

そして、最悪どちらも疎か・・・ところのは同情はできないので、ついていけなくなつた。とでも言ひ換えておひづ。やつは人も中には存在する。

何故こんな盛り上がりに欠けるようなことを話題に出しているのかと言つと、今現在僕の目の前にいる人の境遇がまさにそれであるからである。

「やっぱり考え方直せよ。そんなことをしても、みんなが悲しむだけだ。」

僕は目の前の友達に説得を試みてくる。すると目の前の友達は絶望に陥ったよつた顔で僕に返してきた。

「お前には分からないんだよー。ショウカー！お前みたいに俺は勉強もできないし、運動もいまひとつだ。それなら俺なんかは消えたほう

がマジだ！」

どうしても、説得には応じてはくれない気配だった。ヒツの本人は本気みたいだが、どうしても同情はできない。

「（文武両立ができないから、自殺なんてな・・・）」

だが事は深刻だ。なんとかして止めないと大切なものを失ってしまうことになる。いつなつたら捕まるなり、氣絶せめるなりするしかない。しかし

「俺は何と言われようと、本気だからな。そこから一歩でも近づいてみる。すぐにここから飛び降りてやる。」

ヒツは学校の屋上しかも、相手は手摺りの向こう側。近づけば飛び降りると言つてこむ。やっぱり説得するしかないみたいだった。

「なあ、頼むから考えを変えてくれ。勉強が出来なくとも乐しことが沢山あるじゃないか。」

これが最後の説得になるかも知れない。

「乐しこと・・・そんなもん。」

「無いって言つのか。じゃあお前がクラスでみんなと乐しく笑っていた感情は嘘だったのか。」

作り笑いには限界がある。どんなに、例え自殺したくなるよつた立

場の場所でも楽しい事が必ずあるのだ。

「うう・・・」

「（よし手応えありだ。もう少しで助けることができる。）」

僕は最後の押しに入る。

「生きてれば、良いことがたくさんあるんだ。だからここに戻つてこご。」

僕は最後の説得を終了させた。これで靡いてくれなければ、僕は友達を一人失うことになってしまふのだろうか・・・そして数秒、冷戦のような間が続く。そして

「・・・分かった。お前の言つ通りだな。死んだら何もないもんな。今からそっちに戻る・・・」

俯いている顔からその言葉が聞こえた。しかし俯いている顔はすこし笑顔があるようにも見えた。

とにかく一件落着といいますか。これでまた普段の生活が・・・

ガコン！

・・・今の音は・・・？

一体、何が起こったのだろうか？

僕は今まで、友達と話していたはずだ。そして数秒前に説得に成功した。したはずだ。だが・・・

「なんで？なんであいつ、手摺り事いなくなってるんだよー。」

最悪の事態が本人の意思ではなく起こってしまった。僕は、手摺りの無くなっている部分に走り屋上から下を見た。

そこには絶対に受け止めるのが無理な残酷な現実の光景があった。

「・・・嘘だ・・・嘘だ！！」

僕はその場で、頭を抱え額をコンクリート作りの屋上につけるような体勢で、叫んでいた。

叫んでも変わらないのは分かつていたはずなのに。

その場所でどれだけ同じ体勢でいたのだろうか・・・変えられなかつたのか、あいつは望み通りで納得したのか？
僕は立ち上がり空を見上げる。

「何も変わらなかつたんだ。説得しようと、しまいと・・・涙は流れなかつた。

僕が立つてゐる屋上に今、あるもの、僕と材料のコンクリート、吹き抜ける風、そして・・・

「カット！…カット！」

・・・空気を読まない叫び声？

（琴結学園 中央校舎 屋上）

「カットって言つてるんだから早く戻つてきなさい！」僕は空気をぶち壊した犯人のもとに駆け寄る。

「ちょっと待て、ここまでやらせておいてカットは無いだろ！？一体何が駄目なんだ？」

ここまで本気でやらせておいて中断は納得できなかつた。僕はもつともらしい答えだけを希望した。

「カットの理由？まず一つ目、リアリティが無いわ。」

「今、そこ言つ的一？撮影が始まる以前に指摘してくれよ…。」

「次に二つ目。」

完璧に無視で話しを進め始めた。

「涙がながれてない。」

「はい？」

すると、監督は機嫌が悪そつて答えた。

「『はい』じゃなくて、涙よー涙！ 分かる？ いつこのシーンでは流すのが普通でしょ！」

なんとこか、無茶要求だと思つた。

「プロでも無いのに簡単にできるか！」

「とにかく一 下の方に伝えて、みんなも今日は一日解散！」

「お、おこ・・・」

そう言い、スタスターと台本だけ持つて帰ってしまった。その後、撮影の邪魔にならないようにと物陰に隠れていたみんなが、続々と出て来た。

僕は一旦みんなに切り上げを伝えることにした。

「みんな、今田はいじで中止みたいだ。解散してくれ。僕は下の方に伝えてくる。」

そう伝えるとみんな自分の機材を片付け始めた。僕も早くさつき飛び降りシーンをやつた友達に伝えに行くことにして、屋上から出た。

ガチャガチャと、カメラやマイクといった機材を片付けている屋上。
・ ・ ・ というのが表向きである。

実際は。

「ちやんと撮れてる?」

カメラを、屋上から出て行く少年にペントを合わせている男に微笑みながら聞いてきた。

「はい。バツチリです。これはいい物が出来上がるかもしませんね。」

そうカメラに向かってそのまま答えると聞いてきた女が答えた。
「もちろんよ。絶対この隠し撮りで恋愛ストーリーを完成させるわよ。」

「カットの寄せ集めですけどね。」

そうカメラの男が呟くと怒ったように反論してきた。

「そこを言つたらおしまいでしょ。あの一人がもうちょっとと素直になつてくれれば、編集もはかどるのに…」

そんな愚痴を聞くのも飽きたような顔しながら顔をカメラに向けていた。
ちなみに一人というのは、先程監督をしていた女子とやつも、出て行つた男子である。

「あの、草奏さん。今日はもうこのへりこじしませんか?撮影は順調ですし・・・」

カメラから顔を離し恐る恐る提案する、すると

「何言つてんの、途成君。まだまだ風景とか、ベストタイムの割り出しどか、ロケーションの打ち合せとか、やるじとはじぱいあるのよ。」

「・・・」

その言葉で完璧に反論の予知をなくしてしまった。

「ほり行くわよー途成君。」

「え？ あ、ちょっと待つてください。」

そう言つて一人も、屋上から出て言つた。

残りのみんなも片付けを終えた人から帰つていつた。
かすかにクスクスという、小さな笑い声が数秒あつたかもしれない。

（琴結学園 中央校舎 1階廊下）

「え？ カットで今日は中止？」

「もう・・・悪いけど今日は終わりだ。」

僕は撮影の終了を伝えに来ている。ちなみに田の前にいるのはさつき飛び降りシーンで飛び降りてくれた人だ。

名前を、片桐当夜カタギリトワと叫ぶ。ちなみに設定ではなく実際に友達である。

「バンジージャンプも楽じやないから、終わって欲しかったんだが、まあ仕方ないか？」

「僕に聞くなつて。それにしても本当にこんなんで完成すると思ひつか?」

僕は今一番心配なことを聞いてみた。

「俺に聞いても分からぬ。アヤの決めた予定ならなんとかなるだろ?」

「それを信じるしかないか。アヤは何を考えているのやう。」アヤといふのは、僕達がやっている映画撮影の第一人者監督である。

名前を青蘭アヤ(セイランアヤ)といふ。

「とりあえず食堂にでも行ひ。飛んだら腹減つた?」

「お前が腹減つたのな。よし少し早いけど飯にじみつ。」

僕と当夜は、学食に向かうこととした。早いとは言え腹が減るのは時間的に頷ける。

現在時刻 17時32分

（琴結学園 中央校舎 2階学生大食堂）

学食に来てみると、やはり時間的に早いのか、生徒の存在など感じなかつた。しかし一人だけ生徒を確認した。

「あれ?珍しい・・・ってアヤ?」

「ん？ 何？ あんたも来たの。」

誰もいない学食で、食事をしていたのは先程まで当夜と噂していたアヤであった。

「腹が減ったからな。」

「アヤ。」

そう言つと、アヤは自分の頬んだ狐うどんを黙々と食べ始めた。

「・・・」

「・・・」

「どうにも気まずい・・・しかしアヤとはやつてのりのせいで話す話題が見つからないのが現状だ。

ちなみに当夜は僕のもいつしょに食券を買ってに行ってもらっている。

「あ、あのそ・・・」

あまりに間が持たないので、無理矢理会話を行つことにした。

「なによ？」

ちなみに僕はアヤの方を向いて話しているのだが、アヤは狐うどんを見ながら答えた。

「や、やつぱり涙とかは田舎でなんとか——」

「バン！」

僕が話し終わる前に机に器を力強く置いた音により遮られた。やはりこの話題は・・・

「あの、アヤ。」

すると席から素早く立ち上がり器を持って僕の横に、僕に向いている方向と逆に向いて立ち止まつた。

するとアヤから話し始めた。

「実を言つとね。あのシーン私書いた記憶が無いの。」

「え?」

僕は今衝撃的な事を聞いた気がした。しかしまつたく話が見えない。あの映画の台本は4パートに分かれて作っていた。そしてあのシーンは3冊目に書いているのだが、すべて手掛けたのはアヤだつたはず。

「それどうこいつことだ?」

そう投げ掛けると、ため息をしたのちアヤは話し始めた。

「昨日、夜遅くまで今日やつたシーンの脚本の最終推敲をやつてたの。それで・・・」

何故か言葉が言い淀む。
言いにくいのだろうか。

「『それで』何だ?」

「み、みんなには言わないでよーそ、それで不覚ながら途中で寝ちゃつたみたいだったの・・・」

成る程。言い淀んだのはプライドのせいだった。
しかし肝心の最初の言葉とはまだ繋がっていないが

「それが、どうこう関係があるんだ。」

「ここからが肝心なところ。眠っていた私はまず起きてから書き途中だつた台本を見て驚いたわ。」

「何に?」

そう聞くと、頭の悪い人を見るような目を一瞬して答えた。

「・・・私の書いた覚えのない台詞が何個か書き加えてあつたのよ。」

「

書いた覚えのない台詞。

それを聞いて少し納得した部分はあつたが、それはそれで疑問が生まれる。

「でも、そんな台詞はすぐに消せばいいじゃないか?誰かが勝手に忍び込んで書いたのかも。」

この学園は全寮制だ。

人の部屋に忍び込むのは少し頑張ればたやすいことだ。

「言つたでしょ。覚えがないって。誰かが書いたなんて証拠は無いし、もしかしたら寝ぼけ眼で自分で書いたかもしない。もし後者なら推敲は既に終わっている。だからこの台本で行くしかないのよ。」

成る程。いひいろ煮え切らない態度の理由がわかつた。

「（ふ？）ならむしかして。」

「なあアヤ。」

「何よ？」

一つ確認したことと、アヤに聞く。

「今のアヤ的にはこの台本が何で思つてるんだ？」

「撮影のときにも言つたけど、あれはリアリティが無さすぎてあまりいいとは思つてない。」

「じゃあもし、あの台本を書いたのがアヤじゃない誰かだと証明したらあの台本書き換えてくれるか？」

「ええ。そのつもり。でもそんなことできるの？」

僕は自信満々に答えた。

「ああ。絶対見つけてやる。じゃあ早速捜していく。おへや。」

僕は一気に方向転換して、走って学食を出て学生寮に向かった。

「あ、ちゅうじー・・・・・」

「あれ? どこに行つた?」

「あ、片桐君いたの?」

「おひアヤ。なアリトしらない?」

「たつた今どこかに走り去つて行つたわ。」

「え? (って) とはこれどうすればいいの?)」

片桐当夜の手に持つてゐるもの。

チャーハン × 2

餃子 × 2

人口密度の低い学食はとても広く感じる。だからこそ離れば人の気配は増えてあまり感じないものである。一人の会話をカメラを回しながら物陰から聞いていたとしても。

「まさかこんなシーンに出くわすなんて。」

楽しそうにテンション高めな声が途成に伝わる。

「そ、草奏さん、声が高いですよ。響きやすいんですから自重してください。」

途成が小声で草奏に促した、しかし

「こんな想定外のシーンが撮影できるのに自重なんてできないわ

「！」

「わざわざよつもわいひに声のボリュームが上がってしまった。

「ちよつと、本格的にばれますって！ 一旦寮に帰りますよ。」
途成はなんとかテンション上がりの草奏を引っ張つて学食から退散するにこした。

「ちよつとーまだ撮つてる途中でしょー途成君ーー。」

「 もう。見つかったらなにもかも合なしなんですから分かってくださいーー。」

叫び余韻をしながら学生寮のほうに入つて行つた。

1話「学園生活？」（後書き）

まあ、書いてはみましたが。

まあ設定はその場で作る小説にならうつな事だけ言っておきます。

解説話「琴結学園」

（琴結学園 中央校舎 1階廊下）

映画撮影の3ヶ月前に遡る。具体的には4月の始めの事。とある男子生徒は朝早くに寮を出て散歩をしていた。すると

「・・・」オロオロ

「（何やつてるんだ。あんなといいで。）」

何か拳動不審な人が目の前でうろちょろしていた。しかし制服を着ているので、琴結の生徒だということは分かった。しかし気になることがあった。

「（あの学園のマークの色は僕達と同じ学年みたいだけど、見たことないな。）」

ちなみに、田の前の拳動不審生徒の学園のマークは緑の色をしている。
同じ2年生である。

「・・・あー」

拳動不審生徒がこつちに気づいたようだつた。そもそも安心したような表情を浮かべている。そしてゆっくり僕の前に歩いてきた。

「・・・あの、聞きたいんですけど・・・」

丁寧な口調で恐る恐る話しが始めた。

「ん？（道にでも迷ったのか？この学園は広いからな）」

何となく言いたいことの予想がついた。

そう、この「琴結学園」（ことゆいがくえん）は全寮制ゆえなのか
恐ろしく敷地が広大であり、当然校舎の中も小中高校生が学習して
いるので校舎が一つではないので、慣れても迷うことがあるので。

「あ、あの・・・」

「どうかしたのか？」

ちなみに断つておぐが、拳動不審生徒は男子生徒だ。いや特に言つた意味などない。自己満足だ。

「あ、あの、この学校どんだけ広いんですか？」

「はい？」

この学園がどれだけ広いか？

その質問には答えられる自信が無かつた。校舎の広さを言えばいいのか、敷地の広さを言えばいいのか分からぬし、どうしたものをおえろと言わればまずムリだ。

琴結学園。

校舎数、体育館と講堂を抜けば6つ。

校舎の外の敷地は山、川があり敷地内にカフェ、ゲーセン、映画館、書店、等々、娯楽施設が何故かある。

そんなことを考えていると、

急に男子生徒はあわてふためき出した。

「あ、あ、すみません。質問の順番を間違えました。」

「言いたいことがあるときは、落ちついて、まず深呼吸して。」

「いろいろとテンパりすぎだ。」

一応深呼吸を促してはみたが落ちつくかな。

「ふー、ふー・・・落ちつきました。」

「え？ あ、それはよかったです。」

今のは完璧に深呼吸では無かつたと思うのだが、本人が落ちついた
といつので言わないことにした。

「はい。すみません質問を間違えて、僕は今年からこの学園に転校
してきたのでよく分からなくて。」

「あ～、わうだつたのか。」

成る程それなら挙動不審な理由も説明がつく。

「じゃあ僕が学園の中を案内しようか？」

「え？ 迷惑になるんじゃない。」

「たいしたことはないさ。」

少し黙りこんでしまつたが、すぐに答えた。

「・・・じゃあ・・・よろしくお願いします。僕は途成つていいます。あなたは？」

「僕はリト。稀タリト。^{きせき}」

裏話「学園管理者」

～？？？～

薄暗い部屋にパソコンとモニターが数台ある。パソコンに映し出されているのは、表計算のようなもの。モニターに映し出されているのは、体育館、廊下、教室、食堂と様々である。

そしてその部屋でコーヒーを飲みながら座っている男の人がいた。

「まったく、中の監視くらこもつヒトの奴に遣らせればいいのによ。

」

そんなことをぼやきながら、モニターをたまに見つつコーヒーを飲み、さらにパソコンに向かっていた。

すると

ウイーン

自動ドアが開き、白衣を着た女が入ってきた。入つてすぐ男に近寄り男に話しかけた。

「どうやら真面目にやつてるみたいね。」

そう女が言つと男は少しいらついて話し始めた。

「もう見えるんだつたら、とつとと別の場所に俺を移してくれ…こんなのはもつと下の位の奴がやればいいんだよ。」

「もうはいかないわ。」

「何故だ！！」

女は一回ため息をついて答えた。

「簡単なことよ。あなたより下の位の人はこの建物ではなく、大半が学園の職員として送りだされているからよ。」

「へへへ……」

「分かつたら監視を続けなさい。京次。」

「ちつ！分かつたよ。続けりやいいんだろ。」

再びパソコンやモニターに目を向かわせた。

「そひ。じゃあね。」

女は一言やう言い、部屋を出た。

部屋の外の廊下は打つて変わり、白を基調とした明るい壁で統一され、実際に電灯で明るくなっている。

向こうから少し、年上の男が歩いてきて話しかけてきた

「やあ、管理者の仕事についた彼はどうだった？嬉しそうだったかい？」

「どうもいつも、あんな仕事に嬉しがる人はいないと思いますが。眞面目にはやっていくると思しますけど。」

「そうかいそうかい。眞面目こもっているのならそれでいい。琉穂君。後で彼に伝えてもらえるかな。」

「何をでじょうか?」

「監視の中でも、森の入口や海岸を特に見張るよつこと。」

琉穂は言われた意味がイマイチ理解できなかつた。

「何故そのような敷地の中でも遠い場所を?」

「うむ。遠いからこそ監視がいるんだよ。」

「?」

琉穂が意味不明な顔をして首を傾げていると、それを察したよつて元気な琉穂が話し始めた。

「今年、学園で5年に一回のイベントがあるのは知つているね。」

「はい。それは知つてます。」

「そのおかげで今年は少ないかもしれないが、やはり絶対毎年いるんだよ。」

「何がですか?」

一つため息をついて、琉穂の質問に答えた。

「・・・脱走者だよ。」

「え？でも、この敷地の中できないことなんてほとんど無いはず
——」

「確かにその通りだ。しかし必ずいる。仲間がいるせいなのか毎年
後をたたないんだよ。」

「・・・」

「だから頼んだよ。」

「分かりました・・・」

琉穂は来た道を戻つていった。まつたく想像のしていなかつたこと
だつたからだ

2話「聞き込み？開始」

（琴結学園 中央校舎 2階廊下）

情報収集という言葉がある。

意味は文字通りなのであまり言つ意味すらないと思つ。
僕は積極的に物事の情報収集を行うような性格ではないので、この
言葉を使うことは極端に少ない。

しかし、何か特定の事が起これば使わざるをえないときも存在する。

「さて、誰かに聞き込みするしかないか。」

こんな台詞を言つたのは、映画の撮影を含めても、今が始めてであ
る。探し物が形ある物ならこんなことを言う必要はないのだが、探
し物は、なんといつか手掛かり？真相？犯人？
どれを見つけるかはイマイチ分からぬ。

「とにかく、一つ見つければ何とかなるか。」

僕はそんなことを言いながら、廊下を歩いていた。

具体的な探し物の結論は「アヤの台本を書き換えた証拠」となるだ
け。

通常、刑事ドラマや探偵物の物語には犯人が証拠とセットになつて
ENDを迎えるわけだが、僕なりの終わりは、証拠だけである。
証拠があればアヤが台本を書き換えてくれる。最大の願いである・
・

口をまたいで行動になるかもしけなかつたが、そんなことを言つ

ている余裕はなかつた。何しろ、僕が証拠を探している間にも急けるのが嫌いなアヤの事なので、映画の撮影は進んでいつてしまつ。何とか、問題のシーンは1番最後に撮ることにしてもらつたが早く見つけないとアヤがしびれを切らして、

「もうこのシーンでいくわよーとつと涙を流しなさい！駄目なら私が泣かせてあげるわー！」

となる予感がした。・・・自分の想像力もこんなふつになると考え方である。

「悪い方向は駄目だ！捜さないと。まずは、まあ無難に当夜から聞き込みだな。」

1番行動を共にする機会が多いのであまりいい情報が得られるとは思わないが、聞かないよりマシだと思った。

「当夜は・・・あ、」

僕はあることを思いだしてしまつた。

「学食に行つてたんだつた・・・」

証拠を探す前にこの微妙に忘れっぽい性格を治したい、と僕は思いつつ、学食に戻ることにした。

ちなみに、さつき学食を飛び出してから45分が経過していた。〈琴結学園 中央校舎 2階学生大食堂〉

「・・・ですかにいなか」

現在時刻、6時15分前後。

時間的に生徒の数が増えており学食は、小、中、高校生と様々な年齢層でごった返していた。しかし、とうの搜している人はさすがに45分以上もたつと居なくなるのは当然である。

僕は学食から出ることにした。

「あれー？ リト、何してるー？」

誰かに背後から呼ばれたが、話し口調で顔を確認しながら、誰か分かつてしまふ。

僕は振り向いて声の方に行き話し始めた。

「食堂で遠くから話しかけるな、千秋。」

「うー。呼んであげたのに、リト、ひどーいー。」

近寄つて文句を言つと千秋は怒つたような顔で反論した。

「はいはい。僕が悪かった。」長引ぐのを避けて謝ることにした。しかし、

「うー。そんなんじゃ許してあげないー。」

半ば怒つてゐる理由が、あまりに小さいため僕はため息をつきながらつてきていた。

さつきの僕の言動に千秋にとつてかなり不機嫌になる部分があつたよつなので、振り返りたいところだが、振り返る以前に思い出せない。

「じゃあ、どうしたら許してくれる？」

一応まともに返答することにした。

「（）」で適当な発言をしたらまた長引きかねない・・・）」

そんなことを思い立てていた。僕がそう答えると冗談を言うような顔が何故か千秋から消え、少し真剣な顔で考えるポーズになつてしまつた。

「あ、あのさ千秋・・・」

「待つて！もう少し考えさせて。

いや、そりがせなくて・・・

受け流すためには、たとえのではなくてたのは何故か真剣に考え始めてしまった。

そんなに僕にさせたいことがあるのだろうか？

千秋の考える体勢が始まつてから1分以上経過している。1分とは
ほどほど短いようで待つと長いのだ。

卷之三

L

いつまで体勢崩さず3点リーダーを繰り返すつもりなのか。話しかけてきた時の千秋のキャラはいすこべ。

「あ、あのちむついい加減に――」

「よし！決めたー！」

キラ復活――――――

こんなに息苦しことは思わなかつた。

「やつとか。で、どうすれば許してくれるんだ？」

「んとねー。今度私と一人買い物付き合つてー。」

「え？ それでいいのか？」

結構長い時間使って捻り出したから、もっととんでも要求が来るのかと思ったが意外に普通だつた。

キラを無視した意味は！？

「うん！ たまにはゆっくり遊びたいし。」

キラキラした表情で答えてきた。千秋がいいといふなら僕は構わないのだがそれでも疑問がある。

「でもさ、買い物つて言つても行けるといふ

「いいのいいの。リトが私の荷物全部持つてくれるだけ。」

「えー？」

そつぱつと、千秋は自分のテーブルの上の食器を片付けにカウンターに言つてしまつた。

そして帰つてくるなり一言。

「行く日、決めたら誘うからー。じゃあねー」

「え？ ちょっとーー！」

そう言い千秋はそそくさと、学食から寮の方に帰つて行つてしまつた。

結局何も進まず仕舞いに終わつてしまつた・・・一応残せるものは残しておこう。

あの黄色い髪をした、語尾を伸ばす特徴がある奴。名前を千秋といチアキう。クラスメートである。

これ以上いても意味が無いので・・・あれ？

「やついたら何しに来たんだっけ？・・・あー」

30秒考えて、何とか思いだした。やっぱり物忘れは改善するべきだと思つ。

「当夜はいないし、千秋は・・・まあいいや。次はどこに行こう。う。

始まりだしは悪いが、まだ時間はある。諦めるわけにはいかないので再び知人を思い出すことにした。

2話「置き込み？開始」（後書き）

さて、2話田で思ひうりとかざりつかは別として、一言言つて、
「これ、ネタ大丈夫かな！？」

と愚のことが書いてあるときしばしばあります。
ノリで頑張るしかなこと言い聞かせる。

それが最近の田様です。

3話「聞き込みから得るもの」

情報収集が僕の中で続いているのは当然である。

千秋と聞き込みにならない聞き込みをしてからすでに3日聞き込みを続けている。千秋との会話を反省し雑談に話がズレないように聞き込みをしているのだが、思うような情報、手掛かりは掴むことができずにいた。

ちなみに、この聞き込みを続け思ったことが一つ。
もし有力な情報を持っている人に出くわしたときに多分僕は思うことが一つあるような気がした。

「（もし、有力な情報を知っていたら・・・その人はただのストーカーなのではないか？）」

そんなことを僕は余談で考えていた。まだまだこんなことを考えるのでおそらく気持ちに余裕があるのだろう。本来慌てなくてはならないはずなのだが。

聞き込みを続けていくには、交遊関係や人徳が左右してくるのは当然である。

ちなみにこれが左右しないのは刑事という職業だけらしい。

そのため自然と人数は限定されてくる。

僕はなんとなく聞き込みをした人間、これからできそうな人間を捻り出してみるとこととした。

「・・・んと、」

アヤ
当夜
千秋
途成

・・・先に印象が濃い人間をあげてみた。

『アヤ』・・・当事者なので意味ないし

『当夜』・・・やはり行動が一緒のため意味なし

『千秋』・・・主面が逸れたので駄目

ちなみにほかの一人にも聞き込みを試みようと思つたのだが、はつきり言つてやめることにした。理由は途成は特に聞いても問題はないのだが、問題は草奏である。

「私がどうかした？」

「いやな、草奏に聞き込みをするのは・・・

僕は嫌な予感満載で後ろを振り向いた。

「うわあああ！」

僕は思わず後ろに下がってしまった。すると

「何よ！失礼ね。人の顔見るなり大声だして。」

「・・・そう思つんだつたら急に背後に立たないでくれ・・・

大分寿命が縮んだ気がした。

心臓に悪い。

「ところで私がどうかした？」

「えー？」

「だからさっき私の名前呼んでたわよね？」

「え、えと・・・」

台詞化したつもりはなかったのに何故か声に出していたみたいだ。
というか言ったとしても小声の独り言だ。

恐ろしい地獄耳である。

後が怖いものにはじまかすしかない。

「いや、なんとなく思い出しちゃただよ。深い意味はない。
これでひつかかるとは思っていながら、言つしかないでの仕方なか
つた。

そして肝心の反応は

「ふ〜ん。まあそれならいいけど。」

煮え切らなさ過ぎて、逆に怖い。。。これは面倒を省いて済ませられない
と思つた。

「といひでやう。」

「ん? 何?」

草奏から話を変えてきた。とりあえず安心感が広がった。

「途成君見かけなかつた? わざから何処にもいないのよ。」

「いや、僕は見てないけど。何か用事なのか？」

「い、いや、た、たいした用じゃないんだけど…………」

「？」

何故か途中で言葉を区切り沈黙状態になってしまった。
僕何かおかしな質問でもしたのだろうか？

「草奏？…どうかし——」

「あ——私、用事を思い出したーじゃあなコトー」

「へ？お、ねい！」

僕の呼びかけに答えず、叫んだのちすぐに僕の視界に入らない場所
に走り去つていった。

あの様子なので、なんとなく草奏の考えていることを想像してみる。

「（途成にまた無理難題を押し付ける気かな？）」

頑張れ！途成。

そう僕は心の中で呟いた。

途成を応援するつもりで呟いたのだが、それが逆に自分のしなければならないことを思い出させた。

「しまったー情報収集しなくちゃいけないのにー！」

頭に手を置き、盛大に嘆いてみた。すると、

キーンゴーンカーンゴーン

「ん？」

チャイムの音が鳴り、さらにアナウンスも聞こえてきた。

『まもなく5時になります。用の無い生徒はすみやかに寮に戻りましょう。』

現在時刻午後5時。

高校生からしてみれば、帰るには早い時間なのだが、何分この学園は小学生もいるので、早い時間でアナウンスが鳴る。

「ふー。仕方ない、一旦寮に帰つていろいろ考えよ。」

僕は早いながら寮に戻ることにした。ちなみにいろいろと言つたが具体的には何も考えていない。

琴結学園 生徒寮 第1棟

琴結学園の寮というのは3つの棟、簡単に説明すると3つの寮と呼ばれる建物で構成されている。寮の中といえればいくら3つに分かれているとはいえ全校生徒が帰る場所ということもあり、夜や登校時は大量の人でうめつくされたかも、何かのイベントで並んでいる人のようにも見えるのだ。

そして、もう一つ変わった特徴もあるのだが、それはさておき僕は

長い廊下と階段を3階まで上りようやく自分の部屋の前に着いた。

ふう。とりあえず、ちょっと寝てからまた考えよ。」「

ガチャヤ！

僕は何気なくいつもの部屋に入った。すると、

— ^ ?

—

片方の沈黙は僕だが、もう片方は違う。僕の部屋と一緒に住んでいる、いわばルームメイトなのだが、この後に最悪の展開しか見えてこない・・・

۷۱

—
—

「……」
「…………」

バキ！！

一
が
つ
！

今のは何の効果音と台詞かというと、簡単だ。

うなへる。二五二

「痛ててて・・・」

バタン！

殴られた頬を確認していると扉が勢いよく閉められた。

「何も、あそこまで本氣で殴らなくても・・・」

とは言つたが、さすがに本人にはまずい部分があつたのだろう。いや、おそらく部分どころか全てなのかもしれない。

下着姿からさらに、裸になろうとした瞬間に扉を開け目撃してしまつたら。

ハア～・・・

「リト、何やつてる？」

「ん？当夜か・・・見ての通りだ。」

僕は自分の頬を見せ、扉を指指した。

「んと・・・頑張れ？」

「ああ、大丈夫だ。疑問形は間違つてない。」

そう言つと、当夜は心配そうな顔で去つていった。
そして、殴られた体勢のまま3分が経過した。

ガチャ。

ゆつくりと扉が開く。そして顔半分が扉から覗かせ、僕に小声で話

しかけてきた。

「・・・もういいよ、入って。」

「・・・うん・・・」

僕は相槌を打つて、黙つて入ることにした。というかそうしないとまた展開が最悪だ。

僕達の寮の部屋は、ほとんどの部屋が間取りは同じなのだが、階によつて広さが微妙に違うことがある。

ちなみに僕の部屋は3階の関係上あまり部屋は広くない。

まあ広くはないが、窮屈とも言い難い、それなりの部屋だ。しかし、今の僕の状況的にはもう少し広いほうが良かったと思えてきてしまう。

「・・・」

「・・・」

部屋の中に入つても、僕とルームメイトの沈黙である。別にお互い話さなければならぬわけではないのだが、どうしてだか沈黙といふか、雑談の一つも始まらない。

言つてはみたが、僕はこの状況で雑談を始めるのはじめんこいつなる。

何も言えず、黙つていると、ルームメイトは立ち上がり一言呟いた。

「お、お風呂に入つてくる・・・」

「え？あ、どうだ、いやいくつ・・・」

そう僕が言つと、彼女は早足ともゆつくりとも言えない速さで風呂場に向かつていった。

自分がどうなつていたかは分からぬがおそらく僕も相手も恥ずかしさが込み上げているような顔をしていたに違ひない。

「（自分、恵なりに気まずい空氣に氣を使つてくれたんだろうな）

彼女の名前は、鈴崎 恵といつ。

僕は恵が風呂に入ったのを確認すると、自分のベッドに寝転んでため息をつぐ。

「ふう。ああ、最近は運が悪いな。」

運が悪いといつか、女難の相でも出でいるのではないかと、言つた後に思つた。

「（そもそもこの寮のシステムに問題があるよつた気がするな。）

琴結学園学生寮

多大な生徒数。小中高の全員が住んでいるので1部屋2人のシステムのはいいのだが、問題は今の僕の部屋の様な現状が起つる・・・ほとんどの部屋が男女の相部屋というシステムである。

システムを今更嘆いても仕方がないと、僕は思った。
先程のどたばたのせいで少し忘れてしまっていたが、今僕が考えなければならないことは他にある。

「あー台本書き換えの犯人を搜さないと。」

そう僕は言つと、斜め後ろにある僕の机から映画撮影の台本を取り出す。

何か手掛けりがないかと駄目元で思つたからだ。

「・・・・・」

ただ黙々と台本を読み進める。書いてある一つ一つの台詞に何か無いかと。

『え？ 屋上に？ 一体何しに？』

『それは教えられないな。気になるんなら自分で捜しにいけ。お前に止められるんならな。』

『何を言つてるんだ、寺門。』

『屋上という単語、そしてあの才能の無い奴のことだ、どうなるかはバカじやないお前ならわかるよな。ショウカ。』

『ま、まさか！』

・・・・・そしてこの後場面を変更してアヤから指摘をくらつたシーンが入る。しかし所々場面説明や主人公の心境など台詞ではない部分を入れたとしても、アヤが書いた所とそうでないところの違いはまったく、分からぬ。

「リツ君？ 何見てるの？」

「え？ 恵か。いつのまに出たんだよ。」

「わざわざから出してたよ。リック君、本に夢中になつてゐるから。ところ
で何見てるの？」

この場合『夢中』ではなく『集中』の間違いだとなんとなく思つた。
何せ今は、台本を見ている主役がちがつのだから。
ちなみにさつきの事は完全に落ち着いているようだつた。
なんだか、卑すぎる気もしたけど良しとしよう。多分・・・本来僕
にとつて台本は台詞を覚えるためにある訳で、今回のような使い方
はあまり好きではない。

「ああ。これは映画の台本だよ。」

「映画つてアヤぢゃん達とやつてゐる？」

「アハ。でも、覚えるために見てるんじゃないんだけどな」

「え? じゃあ何のため? といふか、台本つて覚える以外で使うこと
あるの」

恵がもつともらしい質問をしてきた。僕も他人事だったら、そういう見
ているかもしねない。

「ああ。実はな——」

僕はなんとなく、理由を恵に話すこととした。

「こつまで無言でいるつもり？」

「さう言ひたるけど」「触れるな！危険！」とこつ発想しか受かんでこない。

「まあいいわ。あなたが無言を貫くといふことは私が何を言いたいが、分かるといふことよね？なら、話す必要も無いわね。」

現在部屋の中で、半ば正座で尋問状態の僕、途成です・・・何でこんなことになつているのかはすぐに分かります・・・

「とつあえず、单刀直入に私の一番聞きたいことだけ言ひておくわ。どうして昨日アヤに台本の話を持ちかけたの？今一番台本の話題に触れてはいけないときなのは、分かつてるでしょ！」

僕も言わなければならぬことだけは言ひておく。

「や、草奏さん。はつきり言つておきますけど、これ以上あのままでしておけば、ばれるのは時間の問題ですよー。」

「大丈夫よ。触れさえしなければ、事は勝手に書いた通りに進んでいくから。ばれたらアヤの事だからすぐに書き直すから問題無いわ。

「でももし、やつたのが草奏さんだつてばれたらアヤさんに酷い目にありますよー！」

「

脚本を書くのと、監督業務がアヤさんの独壇領域なのは映画撮影班の間では有名だ。当然妥協は許さない。それは草奏さんだつて知つ

てこるはず。

「あの時はアヤの済むよつとしてもらひたわ。」

「でもそれじゃあ、」

「とにかくあまつ余計なことを喋りなによつ。分かつたわね途成君。」

バタン！

そつ言つと、草奏さんは自分の部屋に帰つていつてしまつた。このままだと遅かれ早かれ、草奏さんの立場が危うくなる。といつのも、今の台本で事がしつかり進んでいくのなら僕はこんなことはしない。しかし、この間の学食の会話と、3日間撮影現場に顔を見させてくれない主人公役のコトさんからして進んでくるとは思えなかつた。

「明日、何気なくアヤさんに聞いてみよつ。」

草奏さんは、ああ言つたけどせばぱつぱつおつてはおけない。

一連の理由を恵に話した僕は、再び台本に顔を戻す。

「理由は分かつたけど、それって台本を見て分かるものなの？」

「分からぬけど、他に手掛かりも無いし。かと言つて何にもしないわけにはいかないしな。」

「聞くけど、一回やつてみるとどう選択肢はなかつたの？」

「え？ 何を？」

「だから、一回涙を流すシーンをやろうとは思わなかつたの？リック君、結構演じるのつまりって評判だよ。」

その評判は知らないし、僕が演技が上手いかどうかは自分では分からぬ。

しかし、その発想は何故か無かつた。何故だろ？

「分からぬけど、無意識にやりたくないっていう気持ちになつたのかも・・・」

改めて考えてみると、そつなるのかもしねい。何故か涙には抵抗があるのであるのだ。

「よく分かんぬけど、やりたくないなら私は別に強制してらうつもりじゃないから。」

「うふ。わかつてゐ。ありがとリック。」

とは言つたものの話はまったく前に進まない。それを思い出し頭を抱えていると、

「ねえ、リック君？」

「どうかしたのか？」

台本の予備を見ながら恵が話かけてきた。

「あのね、たいしたことじやないんだけど、これ間違つてない？」

「？」

恵はそのままの顔つきで、台本のあるページを見せてきた。それには何と台詞ではなく、場面と心境説明の文だった。

「『』のページのど『』が間違ってるんだ？」

「うそ。『』の」

「『』んな間違い、アヤちゃんがするのかな？」

僕は今の部分を見て希望がわいてきた。

「あつえない。『』んなミス、アヤがするわけない。」

「じゃあやつぱつ『』れは・・・つてキヤー...。」

「ありがとう！恵。よく見つけてくれた。これでなんとかなる本当
に有難う...！」

僕は希望が見つかって嬉しさのあまり、恵を抱き寄せた。

「わ、わかったから、わかったから／＼／＼

僕は恵の言葉も耳に入らずじまじまそのままの体制でいた。

ちなみにその5分後僕は、恵を離すと。

「????あれ？おーい、恵ー？」

「——————」

何故か、体制そのまま硬直していた。

「（抱きしめたときに、首とか閉めちゃったかな？）

だつたら憑うこととしたと僕は反省することにした。

3話「闇を込みかうむもの」（後書き）

まだまだ、設定が穴だらけなこの小説ですが、どうか長い目でみてください。

キャラの名前に法則があるのへりこは気付くと思います。

では次で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6803m/>

琴結学園の荒日常

2010年11月14日06時36分発行